

【(5) 発問や指示・説明】

③「指示が理解できているかをその都度確認している」

《つまずきの背景》

A 刺激の影響の受けやすさ、B 言語理解の困難さ、C 記憶力の弱さ、D 文脈を理解することの困難さ、N 注意の持続の困難さ、Q 状況理解の困難さ

《解説》

教師は、子どもに分かりやすい発問や指示・説明を行うことが重要ですが、様々な環境要因が絡み合い、十分に理解できていない場合があります。そのため、授業中はその都度、指示が理解できているかを丁寧に確認することが大切です。

学級の中にいる、刺激の影響を受けやすく注意の持続が困難な子どもや言葉の理解が困難な子ども、記憶力に弱さを持っている子どもなどは、口頭による指示の理解ができていないことが多いため、特に理解できているかどうかの確認が必要になります。

上記の困難さのある子どもには、視覚的な情報を提示することを心掛けることで、理解を助けることにつながります。

【工夫点】

- ・問われていることに線を引くことで、指示が理解できているかどうか確認する。(小中高)
- ・教科書のページや問題が合っているかどうかを、子ども同士で確認し合うようにする。(小中高 工夫例 41)
- ・隣同士で教師の説明をもう一度繰り返して言う機会を設け、理解できているか確認する。(小中高)
- ・ポイントとなる発問の場合には、発問後すぐに内容を確認する。(小中高)

◆工夫例 41 「教科書のページや問題が合っているかどうかを、子ども同士で確認し合うようにする」



《小・中・高等学校》

指示が伝わっているかどうか、子ども同士で確認し合えるようなシステムを作っておくと、教師が確認に多くの時間を割かなくてもよいため、授業がスムーズに流れます。

教科書のページを正しく開けているかどうかを確認する一例として、「①教科書の〇〇ページを開けましょう」「②隣の人と確認しましょう」と、言葉を掛け、指示が伝わっていなければお互いに教え合うようにする方法があります。

算数等の問題を行う際に、どの問題を行うのか確認する方法としては、「①〇番の問題を指差しなさい」「②隣の人と確認しましょう。分からない場合は教え合いましょう」「③読みましょう」の流れで問題に取り組む方法があります。

授業に限らず、普段から子どもたちがお互いに助け合える関係づくりを行っておくと、授業においてもスムーズに教え合いができるようになります。